

畳職人—金子進 [前編]

ことわざに「女房と畳は新しい方が良い」と言われたのも今は昔。

集合住宅では日本間のない部屋が増え、

畳を知らずに育つ子供も多いと聞く。

そんな中、機械をほとんど使わず手作業で

畳を作り続ける職人・金子進に話を聞いた。



畳床の外周部を補修して縫い直す。分厚い畳床に何度も針を貫通させる重労働だ。「観光で通りかかった人に、『この畳屋さん、手でやってるよ』って珍しがられます」



瑞泉寺

部屋ごと、使う場所ごとに異なる寸法

紅葉や水仙の名所としても知られる鎌倉の名刹・瑞泉寺。その境内に向かう細い道の途中に、畳工房金子の作業場がある。親方の金子進は、仕事の手を休めることなく話してくれた。

「今やっているのは、一般家庭の畳の『表替え』。昭和の中ごろのものかな。ウチで納めたものじゃないけど、けっこう古い畳ですね」

「表替え」は、畳の中の芯材である「畳床」はそのまま再利用し、表面に巻きつけてある「畳表」を新しいものに交換する作業。いわゆる「青畳」独特のい草の香りが立ちこめる。

よく見ると、畳床の裏側に「八西川北」という文字が書かれている。

「これは八畳の部屋で北側の西っていう意味。つまり部屋の中のどの部分に使うのか書いてあるんです。いくら大工さんが上手でも、部屋を完全に真四角に作れるわけじゃなくて、多少のゆがみとかクセがある。そういう細かいところまで寸法を取ってるから、これを他のところを持つっていつでもちゃんと入らないですよ」

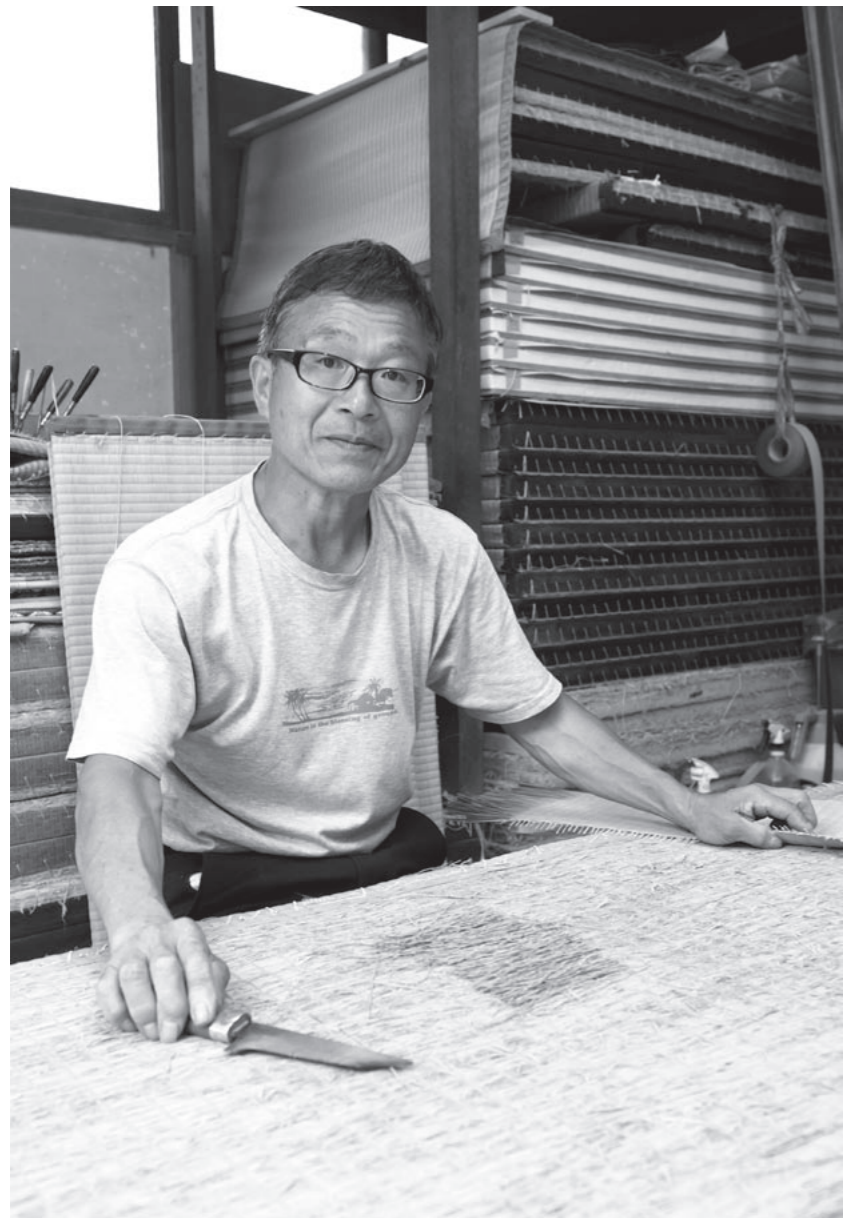
関東と関西で多少の差こそあれ、畳と言えは幅・一間、長さ・二間の基本サイズが定型であり、どこのどの部屋にも同じものが使えると思われがちだが、実は部屋のどの部分に納めるものか、あらかじめ決めて作られている。

「先に畳を敷くとして、それに合わせて部屋を作ってくれば簡単なんですけど、そうもいかないからね(笑)」

「畳職人になることに躊躇はなかった」

「子供のころから勉強が嫌いで。最初から躊躇なくこの職に就くつもりでしたよ。高校だけは行きなよってことで、昼間仕事しながら夜学に四年間通いましたけど、そういうわけだから一五歳から始めて今年六五歳、五〇年ですわね」

金子は昭和二十三(一九四八)年生まれ。十二歳年上の兄・芳幸とともに父の代からの畳屋を

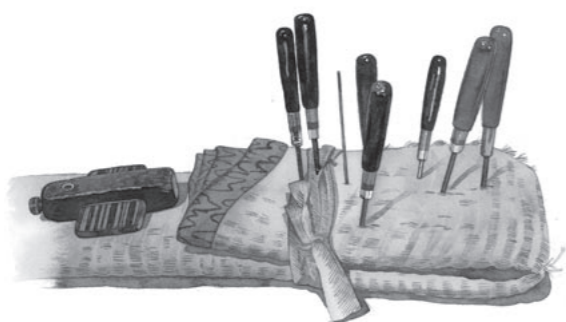


かねこ・すすむ●1948(昭和23)年、神奈川県鎌倉市生まれ。父が開業した鎌倉の畳店を兄とともに継ぎ、半世紀にわたって住宅・神社・寺院・旅館などの畳作りに携わってきた。機械を使わない伝統的な製法を守り続けている。1級畳製作技能士。

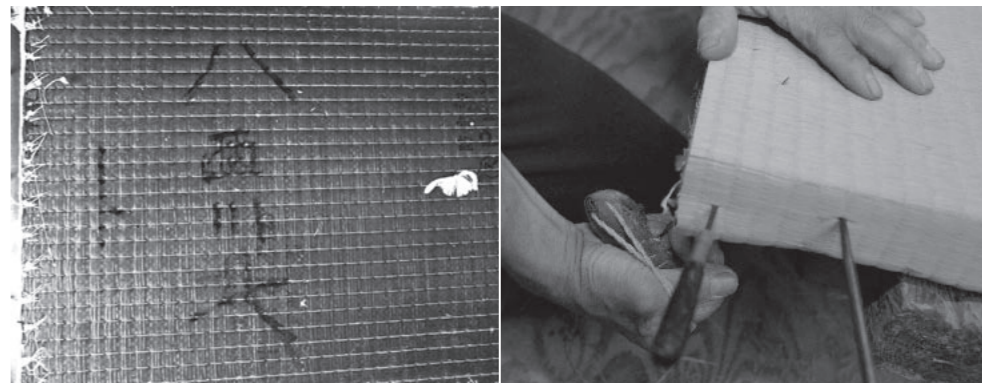
「機械には機械の
便利さがある。でも、
いざという時頼れるのは
自分の腕だけ」

「一概にどちらがいい悪いなんて言えないですよ。昔の機械は精度が悪くて『手の方がいい』って馬鹿にしてたけど、今や主流ですから」
しかし畳工房金子では、ごく一部の縁を縫う作業を除いて全てが手仕事だ。
「最初から機械ありきで教わっちゃうと、何かあった時にどうしようもない。手で覚えておけば、いざという時の対処ができる。だから

この技術は残しておきたいっていうのもあるし、何よりも私は手でやった方が面白いんです。五〇年同じように作ってきたつもりでも、毎回毎回、一畳一畳違う。新築の部屋に持っていく畳がきれいにすつと納まるかどうか、入れる時は今でもドキドキしますよ」
手仕事ならではの緊張感と昂揚感を味わうため、金子は今日も畳を作り続ける。



畳表を畳床に仮止めする「まち針」



右/畳床は大事に使えば50年は持つ。「表替え」で表面を張り替えるだけでリニューアルできる経済性も畳のメリットだ。左/畳床の裏に、位置と方角が書かれている。最初に部屋の寸法を測る時点から高い精度が要求される。

継ぎ、一般住宅だけでなく瑞泉寺、鶴岡八幡宮、鎌倉宮など神社に納める畳も手がけてきた。
「親父が鎌倉に来たのが大正十一(一九二二)年。親戚がここで『関芳畳店』という店をやっている。その職人になったんですけど、翌年の関東大震災で親父が亡くなった。ところが親方に跡取りがいなくて…。当時は鎌倉でも大きな畳屋さんが職人もたくさんいたんですけど、結局親父がそこを継ぐことになったんです」
その後、昭和五(一九三〇)年に父が独立、関芳畳店は廃業したため、その顧客も父が引き継ぐことになった。

「最初は針の使い方を身につけるのにいいっていうんで、ゴザを縫わされましたね。親父が家の作業場で仕事してる時はそばで見ましたけど、そのころの仕事はだいたい納める先の家まで出かけて、その庭で作業をやる。私はついて行ってもやることないから留守番で、『帰るまでにこのゴザ五枚作っとけ』と。で、教わった通りやるんだけど、できてないと怒られたり。一人で表替えがある程度できるようになるまで、三年か四年かかりました」

日本独自の建材——畳の現状

畳は日本で考案され、発展してきた独自の建築材である。初期は藁を編んだ葎状のものを板

の間の座る場所に敷いて座布団のように使っていたが、鎌倉時代あたりから部屋全体に敷き詰めて床材として使用するようになり、江戸時代には庶民の家屋にも浸透していった。
約三〇センチの稲藁を厚さ五センチほどに圧縮した「畳床」に、草で編んだ「畳表」を巻きつけ、さらに縁の部分に「畳縁」で縫いつけるのが基本構造。断熱性・保温性・吸放湿性に優れ、弾力のある素材のため衝撃や音の伝達を和らげる効果もある。高温多湿の日本の気候に適した特長を備えているが、手入れが楽なフローリングの普及とともにその数は減少の一途をたどってきた。
「昔ほどの家にも畳の部屋がいくつもあって、暮れになると毎年のように畳を張り替える家があったんですよ。新年をまっさらな畳で迎えたっていう年中行事みたいなもんでしょうけどね。だから畳屋の年末は忙しかった」
「今は和室自体が減ってるし、日本間があっても物置にしてるっていうし…。表替えや裏返しもなかなかやらないから、若い人は『畳は張り替えて使うもの』っていうことも知らないんだろ。うなあと思いますね」

「手仕事」への思い、達成感やみつきに

結果、畳産業も合理化を迫られ、ほとんどの工程で機械を使って製造する業者も多い。